

「手段・方法」を表すメタファー表現に関する一考察*

山 添 秀 剛

要 約

メタファーは、人間が「世界」を捉えるその認識・発想を反映する。ある目的を実現するために講じられる「手段・方法」が、メタファーで表される場合がある。例えば、She has explored all the available *avenues* for change. (Kövecses 2002: 138) , He finally found the *key* to the problem. (Lakoff, Espenson, and Schwartz 1991: 195) , Laughter is the best *medicine*. (LDOCE) など。このような「手段・方法」を表す英語のメタファー表現は、他にどれだけ実例が存在し、どのような種類に分類できるだろうか。また、その種類は、それぞれどのような認識に基づき成立している表現なのだろうか。本稿では、認知言語学の知見を生かし、「手段・方法」を表すメタファー表現について考察する。

キーワード：「手段・方法」、メタファー表現、概念メタファー、多義性、意味拡張

1 はじめに

メタファーといえば、伝統的には、弁論術や修辞学で扱われる転義の一種で、説得術としての非日常的な独創的表現もしくは特殊な効果をねらう文学的装飾・詩的技巧と考えられてきた。この場合のメタファーは、あくまで言語表現そのものに主眼をおく。

しかし、20世紀に入り、それまでかすかに胎動していたある考え方が、認知言語学の隆盛と相俟って、一気に産声をあげることになる。⁽¹⁾メタファーを認識論的な観点から捉えなおすという見方である。この見方にたてば、メタファーを次のように捉えなおすことができる。メタファーとは、言語表現自体を問題にする旧来の修辞学的な観点以前に、そもそも人間が「世界」を捉える際の認識過程そのものである。このようなメタファー的な認識(に基づき成立する我々の概念体系)は、非凡な才能の持ち主だけでなく、すべての人間が日常生活で使用する通常の言語表現に反映する。さらに、このメタファー的な認識は、言語表現のみならず、思考・推論・行動などにまで影響を及ぼす。このようなメタファー観の変遷を経て、現在では認識論的なメタファー研究が盛んに行われている。

本稿では、認知言語学の知見を生かし、「手段・方法」を表す英語のメタファー表現につい

て考察する。例えば、次の(1)は、斜体部分がすべて「手段・方法」を表すメタファー表現である。

- (1) a. Marriage is not the only *route* to happiness. Kővecses 2002: 138
 b. Michael thought an MBA would be a *ticket* to success.
 c. Economic sanctions will be used only in the last *resort*. LDOCE⁽²⁾

(1a)の route は、もはや文字通りの空間的な意味合いはなく、抽象的な「手段」を表す。「幸福に至る唯一の道」と訳せることから、この場合、「道」という日本語の多義構造と類似することがわかる。(1b)の ticket も、文字通りの具象的・物質的な意味合いはなく、抽象的「手段」を示す。この場合も「成功への切符」と訳せることから、日本語「切符」の多義構造と類似する。(1c)は「経済制裁は最後の手段としてしか用いない」を意味する。この場合は、日英語間に認識・発想上の対応関係はない。

このように、ある目的を実現するためにとられる「手段・方法」が、メタファー表現で表される場合がある。このようなメタファー表現は、他にどれだけ実例が存在し、どのような種類に分類できるだろうか。また、その種類は、それぞれどのような認識に基づき成立している表現なのだろうか。本稿では、「手段・方法」を表す英語のメタファー表現について考察する。構成は次の通り。次節では、先行研究として、Lakoff, Espenson, and Schwartz (1991), Kővecses (2002), Macmillan を概観し、それぞれの要点と問題点を確認する。3節では、「手段・方法」を表すメタファー表現を分類整理し、考察を加える。4節で、結論を提示する。

2 先行研究

この節では、「手段・方法」を表すメタファー表現に関する先行研究として、Lakoff, Espenson, and Schwartz (1991), Kővecses (2002), Macmillan を取り上げる。Lakoff, Espenson, and Schwartz (1991) は、便利なメタファー・リストであり、認知言語学の旗頭のひとり、George Lakoff が中心になり築いてきたメタファー理論に基づく。Kővecses (2002) は、Lakoff のメタファー理論の流れを汲む比較的新しい認知言語学の研究書である。Macmillan は、同じく2002年発行の比較的最近の辞書で、41箇所に Metaphor Boxes と呼ぶ囲み記事があり、当該語に関連するメタファー表現について解説がなされる。これらを順に見よう。

2. 1 Lakoff, Espenson, and Schwartz (1991)

筆者の知る限り、「手段・方法」を表すメタファー表現を中心に扱う研究は、ほとんどのに等しい。あるにせよ、その場合は、数多くあるメタファー表現郡の一例という小さな扱

いでしかない。この点で、Lakoff, Espenson, and Schwartz (1991) も、「手段・方法」を表すメタファー表現が網羅される形で考察している訳ではない。しかし、その分析手法として、個々のメタファー表現の背後にあり、メタファー表現を生み出す認識上の基盤ともいえるべき「概念メタファー」を用いる点は、確認するに値する。彼らのメタファー理論の特徴は、まさにこの「概念メタファー」を想定する点にある。

「概念メタファー」とは、抽象的で分かりにくい概念領域A (target domain) を具体的で分かりやすい概念領域B (source domain) で理解する、我々の認識過程を意味し、Lakoff 流では A IS B の形式を用いて表す。例えば、IDEA IS FOOD (Lakoff and Johnson 1980: pp. 46-47) を見よう。これは、認識上、我々が「考え」という概念領域を、「食べ物」という概念領域で理解していることを示す。そして、このような認識は、個々のメタファー表現 (What he said *left a bad taste in my mouth.* / There are too many facts here for me to *digest* them all. / I just can't *swallow* that claim. / He *devoured* the book. etc.) に反映する。

以上を踏まえ、本題に入ろう。次の(2)から(6)は、Lakoff, Espenson, and Schwartz (1991) の中で、「手段・方法」を表すメタファー表現と関わる部分である。まず、(2)を見よう (*ibid.*: 21)。(2c)と(2e)は、「手段・方法」を表すメタファー表現を含む事例である。斜体部分の前置詞 *through* が、文字通りの空間経路（「空間」を通して）から抽象的手段（「手段」を通して）に意味が拡張している。

- (2) a. MEANS OF CHANGE IS PATH OVER WHICH MOTION OCCURS
- b. Special case 1: Means of Change of State is Path
- c. He went from fat to thin *through* an intensive exercise program.
- d. Special case 2: Means of Change of Action is Path
- e. He eased into bathing daily *through* the help of his friends.

(2c)や(2e)のようなメタファー表現の背後にある我々の認識は、それぞれの概念メタファーで表される（(2c)の概念メタファーは(2b)、(2e)は(2d)）。

この場合、注意を要するのは、概念メタファーが2段階で設定されている点である。例えば、(2c)と(2e)は、いずれも抽象的手段を表すのに空間経路表現 *through* を用いる点は共通であるが、手段を講じることでどういう結果になるかという観点からさらに分類されている。(2c)であれば、「集中的なエクササイズ」という手段で、「痩せる」という結果になること（状態変化）を表す。他方、(2e)は、「友人の助け」により、「楽に入浴ができる」という結果になること（行動の変化）を表す。このような認識の差を表したのが、それぞれの概念メタファー(2b)と(2d)である。(2b)「状態変化の手段は経路である」という認識があつて、(2c)のようなメタファー表現が、(2d)「行動変化の手段は経路である」という認識があつて、(2e)のようなメタファー

表現が可能になる、と考える。さらに、(2b)と(2d)を包括する親概念メタファーとして、(2a)「変化の手段は移動が起こる経路である」も想定されている。

また、次の(3c)も抽象的手段を表すのに空間経路表現 *through* を用いるが、(2)との分類上の区別は、手段を講じた際の結果に関して、使役（他動詞）構文になる点にある。

- (3) a. CAUSATION IS CONTROL OVER AN OBJECT RELATIVE TO A POSSESSOR
- b. Causal Means are Paths for Properties Moving Relative to Affected Parties
- c. She acquired grace *through* practice. (ibid.: 23)

(2)と(3)は、抽象的手段を表す空間経路表現の品詞が前置詞であった。次に見る(4)と(5)は、名詞としての空間経路表現である。また、(2)と(3)は、それぞれのメタファー表現を成立させる認識基盤として、2段階の概念メタファーを想定していたが、(4)と(5)では、3段階で概念メタファーを捉えている。概念メタファーをどの程度の階層で規定すべきかについては、本論の趣旨からはずれるので、言及は避けた。ここでは、「手段」を表すメタファー表現のさらなる事例の確認にとどめる。

(4d)は「かっこよくなるには、このようにオーバーオールを着ないと」、(5d)は「もしこれがうまくいかなければ、違う手段をためすだけさ」、(5e)は「それは険しい道だけど、彼ならうまくやり遂げるよ」を意味する。名詞 *way*, *route*, *path* はいずれも、もはや物理的「経路」を文字通りに表さず、目的を達成するための「手段・方法」を表す。

- (4) a. ACTION IS SELF-PROPELLED MOTION
- b. Special case 1: Purposeful Action is Directed Motion to a Destination
- c. A Different Means of Achieving the Purpose is a Different Path
- d. To be cool, you have to wear your overalls this *way*. (ibid.: 30)
- (5) a. LONGTERM PURPOSEFUL ACTIVITY IS A JOURNEY
- b. Special case 1: Life is a Journey
- c. The Means for Achieving Purposes are Routes
- d. If this doesn't work, I'll just try a different *route*.
- e. It's an arduous *path*, but he'll make it. (ibid.: 36-37)

とくに(5e)は、*an arduous path* と *make it* からわかるように、文全体が「移動」に関する比喩表現で構成されている点が興味深い。

ここまでは、「手段」を「経路」で表すタイプのメタファー表現だった。最後の(6)は、少しタイプが異なるようである。

- (6) a. A PROBLEM IS A LOCKED CONTAINER FOR ITS SOLUTION
b. Means to Solving is Means to Opening
c. He finally found the *key* to the problem. (ibid.: 195)

(6c)の意味は、「彼は、その問題を解く鍵をようやく見つけた」である。(6c)の *key* には、もはや文字通りの具象的な意味合いはない。この点は、日本語「鍵」の多義構造と対応する。この *key* という語は、これまで見てきた(2)から(5)のような「経路」表現ではなく、「道具」で「手段・方法」を表すタイプであることがわかる。

Lakoff, Espenson, and Schwartz (1991)では、以上のように、「手段・方法」のメタファーを扱う。最後に、圧倒的なデータ不足を、その問題点として指摘したい。「手段」を「経路」で表すタイプの実例は、前置詞 *through*, 名詞 *way*, *route*, *path* だけ、「手段」を「道具」で表すタイプの実例は *key* のみであった。

2. 2 Kövecses (2002)

前節の Lakoff, Espenson, and Schwartz (1991)と同様に, Kövecses (2002)も, 「手段・方法」を表すメタファー表現のみを詳細に考察する研究ではない。メタファーを体系的に扱うなかでの一事例として部分的考察をするにすぎない。ただし, Lakoff 流に概念メタファーを用いるものの, Lakoff, Espenson, and Schwartz (1991)よりもシンプルに分析している点は興味深い。

実際, Kövecses (2002: 137-138)では, 「手段・方法」を表すメタファー表現群の例として, (7b-e)を挙げる(例の種類は, 重複を避け, 主要なものに限った)。このような例の背後にある概念メタファーは, (7a)「手段は経路である」のように, Lakoff, Espenson, and Schwartz (1991)よりも簡略に捉える。

- (7) a. MEANS ARE PATHS
b. The *route* toward a market economy would be a very difficult one.
c. Let's hope he can keep the team on the *road* to success.
d. She has explored all the available *avenues* for change.
e. This job isn't a *path* to riches. Kövecses (2002:138)

前節の(2)から(5)と同様に, 斜体部分の, 名詞 *route*, *road*, *avenue*, *path* は, 本来空間移動と関係するが, ここではそれぞれ抽象的手段を表す。(7b)は「市場経済に向けての道筋」, (7c)は「成功への道」, (7d)は「変化に向けての利用可能な道」, (7e)は「大金持ちへの道」を表す。それぞれ日英で対応することがわかる。

名詞 road, avenue など、前節と比べ、若干とはいえ、例の種類が増えたことと、概念メタファーが分かりやすい点は、評価できる。しかしながら、依然としてデータ不足の感は否めない。この点を大きく前進させた辞書の記述がある。それを次に見よう。

2. 3 Macmillan

学習英英辞典である Macmillan の特長として、“Metaphor” と題する囲み記事の存在が挙げられる。最近のメタファー研究の知見を利用し, achieve, angry, argument, busy, confused, conversation など、計41項目の比喩用法について、解説が当該見出し語の末尾でなされる。この中には、method も含まれる (p. 1136)。その記述内容を確認しよう。

- (8) A method of doing something is like a **road** from one place to another. The process of doing something is like a trip.
- (9) a. What's the best *way* of doing it?
 b. This is a certain *route/path* to success.
 c. Maybe we should try a different *approach*.
 d. We have explored several different *avenues*.
 e. There's a useful *short cut* that I can show you.
 f. He showed us what to do, *step by step*.
 g. This job is just a *stepping stone* for me.
 h. We need to *move* things along a little faster.

(8)は、例文(9)に関する解説部分である。ここでは、「何かをする方法は、ある場所から別の場所への道のようなもの。何かをするその過程は、旅のようなもの」と、直喩 (simile) の形で説明している。最初の一文は、前節に見た MEANS ARE PATHS (手段は経路である) という概念メタファーと同義と見ていいだろう。この説明に対応する例文は、(9a-e) のような経路表現といえる。なかでも approach と short cut は、前二節にはなかった表現である。

(8)の後半部分の説明に対応する例は(9f-h)であり、それぞれ、(9f) step by step は「一步一步」、(9g) stepping stone は「踏み [飛び] 石」、(9h) move things along は「事を進展させる」を表す。これらは、厳密に考えると、喩えられる対象が「手段・方法」ではなく「(事の)経過」であるので、一見すると、本論が扱うべき対象ではなさそうである。しかしながら、(9f) と (9g) については、再考の余地もあるので、3 節考察のうちの 3.1 節で改めて議論したい。

原文での説明順は前後するが、次の(10)を見よう。これは、例文(11)についての解説である。やはり二文で説明する。一文目は、「何かをするために使う方法は、道具や機械のようなもの」と、「手段・方法」そのものについて説明し、二文目は、「何かをするその過程は、機械を使う

ようなもの」と、「(事の) 経過」について説明する。この点は、(8)と同じである。

- (10) The methods that you use to do something are like **tools** and **machines**. The process of doing something is like using a machine.
- (11) a. It takes years to learn the *tools* of the trade.
b. We have a very efficient *mechanism/apparatus* for dealing with this.
c. Some search *engines* are more powerful than others for retrieving information from the web.
d. It is an important part of the *machinery* of government.
e. It is an effective *instrument* of government.
f. We don't have much political *leverage* in this matter.
g. I know very little about the internal *workings* of the company.
h. Everything is running like *clockwork*.
i. We're *firing on all cylinders*.
j. You should set the *wheels in motion* now.
k. We need to *gear up* for the final push.
l. She *engineered* the public relations campaign.

(10)の一文目に対応する例は、(11a-f)だろう。このタイプの表現は、Kövecses (2002) では全く扱われず、Lakoff, Espenson, and Schwartz (1991) では、(6c) He finally found the *key* to the problem. の一文のみであった。この意味で、(11a-f)は貴重なデータといえる。(9a-e)が「経路」表現で「手段・方法」を表したのに対し、この場合は「道具」に関する表現で「手段・方法」を表す。

また、(10)の二文目の説明に対応する例は(11g-l)だろう。それぞれ、(11g) the internal workings of the company は「その企業の内部活動」、(11h) run like clockwork は「ぜんまい仕掛けのように動く→計画通りに進む」、(11i) be firing on all cylinders は「エンジン全開である→絶好調である」、(11j) set the wheels in motion は「車を動かす→活動を始める」、(11k) gear up は「ギアを入れ(て動力を調整す)る→調整 [準備] する」、(11l) engineer は「設計する→画策する」を意味する。これらは、喩えられる対象が「手段・方法」ではなく「(事の) 経過」であり、この場合は本論が扱うべき例ではない、と考える。

「手段・方法」を比喩的に表す場合、「経路」表現だけでなく、「道具」に関する表現も数多くあることを示した点で、Macmillan の記述は重要である。しかし、さらなるデータの可能性や理論的な面からの整理という点では、依然心許なさが残る。この点を次節の考察にて克服したい。

3 考 察

前節では、先行研究として、Lakoff, Espenson, and Schwartz (1991), Kövecses (2002), Macmillan の要点ならびに問題点を概観した。これを踏まえ、本節では、「手段・方法」を表すメタファー表現について考察する。

3. 1 MEANS ARE PATHS タイプ

2 節先行研究で見たように、「手段・方法」を表す英語のメタファー表現は、その捉え方の面でいくつかのタイプに分類できる。そのひとつは、MEANS ARE PATHS タイプである。2 節で出た例文を改めて種類別に整理すると、(12)と(13)のようになる。(12)は名詞、(13)は前置詞の例である。

- | | |
|---|--|
| (12) a. Maybe we should try a different <i>approach</i> . | Macmillan |
| b. She has explored all the available <i>avenues</i> for change. | Kövecses (2002 : 138) |
| c. This is a certain <i>path</i> to success. | Macmillan |
| d. Let's hope he can keep the team on the <i>road</i> to success. | |
| e. The <i>route</i> toward a market economy would be a very difficult one. | Kövecses (2002 : 138) |
| f. There's a useful <i>short cut</i> that I can show you. | |
| g. What's the best <i>way</i> of doing it? | Macmillan |
| (13) He went from fat to thin <i>through</i> an intensive exercise program. | |
| | Lakoff, Espenson, and Schwartz (1991 : 21) |

これらはすべて「手段・方法」を「経路」に見立てた表現である。すなわち、ある「目的」を達成するために取られる「手段・方法」を、「目的地」に通じる「経路」として理解しているわけである。この点は、「手段」と「経路」の部分的対応関係だけでなく、起点・経路・着点スキーマ全体が関わる。例えば、(12b)の *for*, (12c, d)の *to*, (12e)の *toward* が空間の「目的地」から抽象的な「目的」に意味が展開する点に注目。あるいは、(13)を *By hitchhiking I went from Zimbabwe through Zambia to Tanzania.* と比較すれば明白のように、もともと空間領域に属する「起点」「経路」「着点(目的地)」が、それぞれ抽象的な「初期状態」「手段」「結果状態」に構造的に対応することがわかる。

どの例も日本語に直せばおおよそ対応することから、日本語にもこのタイプの認識があるといえる。これらの類例は、さらにはないだろうか。以下で例を順に見よう。まず、(14)と(15)から。(14)は名詞、(15)は前置詞の例。

- (14) a. Diplomacy will smooth your *pathway* to success. Cobuild
 b. The police are following several different *lines* of enquiry. LDOCE
 (15) a. Please send submissions *by* email. 多義ネット
 b. Most people buy a home with a mortgage *via* a building society. NODE

(14a)は「成功への道」、(14b)は「調査の筋道」(調査方法)、(15a)は「Eメールで」、(15b)は「住宅金融組合を介した住宅ローン」を意味する。

興味深いことが2点ある。この2点とも多義性とかかわり、『英語多義ネットワーク辞典』(以下、『多義ネット』とする)が役立つ。ひとつは、(14b)にある名詞 *line* の多義構造について。『多義ネット』によれば、*line* の中心義は「(筆記具などで引いた) 線」であり、ここから、「線の一定方向に伸びる特性」を類似点として、「人・乗物などが進む道筋」(経[線, 航, 空]路)へ意義がメタファー拡張する。さらに、この拡張義から、(14b)のような「活動などが進む道筋」(手段・方法)に意義がメタファー拡張する。この多義構造を見れば、中心義は「線」であるが、その後に、MEANS ARE PATHS の認識に基づく意義展開があることがわかる。

もうひとつは、(15a)の前置詞 *by* の多義構造について。『多義ネット』は、*by* の中心義を空間用法「〈人・物〉のそばに」と定める。そこから「〈特定の時間〉のそばに」(…までに)や「〈手段・方法など〉を通して」(…によって)にメタファー拡張する、と記述する。これは非常に重要である。実際、意義が「具象義から抽象義へ」展開するその方向性は、経験の身体性や思考発達・言語獲得の段階性などからも裏付けられる。『多義ネット』では、*via* という前置詞は扱わないが、(13)の *through* や(15a)の *by* と同様に、*via* も文字通りの空間経路(「〈空間〉を通して」)から抽象的手段(「〈手段〉を介して」)に意義がメタファー拡張する。

これまでの例は、*path*, *road*, *route*, *way* などのように、「道一般」を表す語が「手段・方法」を意味していた。次の(16)は、いずれも、この「道一般」を表す語の下位レベルにおさまる「特殊な経路」を指す語である。

- (16) a. Columbia College has functioned as a social *escalator* for young people. Google
 b. One's school background often serves as a *ladder* to quick promotion. グローバル
 c. Step by step, you will ascend the *staircase* to success. Google

(16a)は「出世の道」、(16b)は「昇進手段」、(16c)は「成功への階段」を意味する。このような拡張義を支える元の意味(「エスカレーター」「はしご」「階段」)はいずれも、人・物が移動する「経路」という点で *path*, *road*, *route*, *way* などと機能を同じくするが、それぞれ特殊な構造・形状を持つ下位レベル語である点で異なる。(16)のような「特殊な経路」の場合も、「手段・方法」を表す事例が存在することがわかる。

ここまでの事例は「経路」全体に焦点が絞られる場合であったが、(17)はいずれも「経路」の一部分を表す事例である。

- (17) a. Extreme right-wing parties gained a *foothold* in the latest European elections.
 b. This is the first *step* in reforming the welfare system. LDOCE
 c. This job is just a *stepping stone* for me. Macmillan

(17a, c)は「足がかり」、(17b)は「第一歩」を意味する。それぞれの元の意味を確認すると、*foothold* は、岩山を滑り落ちずに登るときに踏ん張るためのひとつひとつの「足場」、*step* は、歩行する際の「ひと足」「ひと足」、*stepping stone* は、浅瀬や庭園にあるひとつひとつの「飛び石」を指す。いずれも複数の部分的要素が結びついて、全体として「経路」になる。その「ひとつ」を取り出した表現といえる。このことは、(17a, c)の不定冠詞 *a* や(17b)の *the first* という表現からも窺い知れる。また、「手段・方法」を表す一般語である *means* の語の成り立ちも、この議論と関連していて興味深い。そもそも単数形である *mean* という語は、「(両極の) 中間点」を意味する。この「中間点」が部分的要素として複数結びついて、「点」から「線」、すなわち「経路」となる (cf. 『多義ネット』 p.595)。形態論的に複数形が常態である *means* という語は、「点」が「線」を構成するという認識と、その「線」すなわち「目的地」に行くための「経路」を（「目的」を遂げるため）「手段・方法」と捉える認識に基づき成立している。

また、(17)のような事例が今まで見てきたものと異なることを示す証拠として、もう一度(16c)を見よう。

- (16) c. *Step by step*, you will ascend the *staircase* to success. Google

「一歩一歩、成功への階段を上っていく」を意味する(16c)には、抽象的な「経路」全体を指す *staircase* という語と、その経路の部分を表す *step by step* という句が矛盾することなく共存する。この点は、同じく「手段・方法」を表す場合でも、「経路全体」を表す表現と「経路の一部分」を表す表現があることを示してくれる。したがって、(17)のような類いを概念メタファーで厳密に表すとすれば、*MEANS ARE PART OF PATHS* となるかもしれない。

最後に、(18)のような例を見よう。

- (18) a. The new democracies are expected to adopt a middle *course* between communism and capitalism. CIDE
 b. We are happy with the *direction* the club is taking.

- c. The meeting is open to everyone, whatever their political or religious *orientation*.

LDOCE

- d. Her first job was as a lawyer, but then she changed *track* completely and became a doctor.

CIDE

(18a)は「共産主義と資本主義の間にある中間的な進路」、(18b)は「そのクラブが取っている方向性」、(18c)は「政治的・宗教的姿勢がどうであれ」、(18d)は「方向性を変えた」を表す。これらは、一見すると、その根底で「移動」を前提とするために、今まで見てきた MEANS ARE PATHS タイプと混同しそうになる。しかし、(18)は、厳密に言えば、「手段・方法」ではなく、「方向性、方針、姿勢」を表すメタファー表現である。さらに、それぞれの元の意味も、「経路」そのものではなく、「進路・方向」を表す。したがって、(18)は、MEANS ARE PATHS タイプに含めるべきではなく、敢えて概念メタファーを用いてその差異を表せば、HOW THINGS DEVELOP ARE DIRECTIONS タイプの事例といえよう。

また、この差異を明示する例として、(19)が挙げられる。

- (19) It's only a small improvement but at least it's a *step* in the right *direction*. OALD

「それは、ささやかな改善点にすぎないが、すくなくとも正しい方向に一歩進んだといえる」を意味するこの例には、先に見た MEANS ARE (PART OF) PATHS タイプの語 *step* と HOW THINGS DEVELOP ARE DIRECTIONS タイプの語 *direction* が矛盾なく共存する。

3. 2 MEANS ARE TOOLS タイプ

「手段・方法」を表す英語のメタファー表現を分類するにあたり、前節とは異なるタイプとして、MEANS ARE TOOLS タイプが挙げられる。このタイプも、すでに2節で出た例文を改めて種類別に整理すると、(20)のようになる。

- (20) a. We have a very efficient *apparatus/mechanism* for dealing with this.
 b. Some search *engines* are more powerful than others for retrieving information from the web.
 c. It is an effective *instrument* of government. Macmillan
 d. He finally found the *key* to the problem. Lakoff, Espenson, and Schwartz (1991: 195)
 e. We don't have much political *leverage* in this matter.
 f. It is an important part of the *machinery* of government.
 g. It takes years to learn the *tools* of the trade. Macmillan

これらはすべて「手段・方法」を「道具」に見立てた表現である。すなわち、ある「目的」を達成するために取られる「手段・方法」を、ある「用途」を果たす「道具」として理解しているわけである。例えば、(20a)は「非常に効率的な仕組み」、(20b)は「検索エンジン」⁽³⁾、(20c, f)は「政府機関」⁽⁴⁾、(20d)は「その問題を解く鍵」、(20e)は「政治的影響力」、(20g)は「商売道具」⁽⁵⁾を表す。

このタイプを明らかにした Macmillan の功績は大きい。さらに調査すると、多様な実例が出てくる。これを「道具」の種類に応じて下位分類しながら確認しよう。

(21)の device と implement は、(20)で見た apparatus, instrument, machinery, mechanism, tool と同様に、いずれも本来的には広く様々な「道具一般」を意味する語である。やはり同様に、「手段・方法」の意義にメタファー拡張する。

(21) a. The first-person narrator is a linguistic *device* that has been used by many novelists and poets throughout the ages. CIDE

b. UNICEF was born of the tragedy of war to become a major *implement* of peace. Google

(21a)は「一人称の語りは、昔からずっと多くの小説家や詩人に使われてきた言葉の仕組みである」、(21b)は「ユニセフは、戦争の悲劇から生まれ、主要な平和機関となった」を意味する。

(20)の apparatus, instrument, machinery, mechanism, tool や(21)の device, implement は、広く様々な「道具一般」を意味する語であった。これに対し、次に見る(22)から(25)までの例は、(20b)の engine, (20d)の key, (20e)の leverage と同様に、それぞれ「道具一般」を指す語ではなく、その下位レベルに位置する「個別具体的な道具」をその本来的意義とする。

(22) a. What's the *drill* for getting the tickets? 多義ネット

b. Rich countries use foreign aid as a *lever* to achieve political aims.

c. *Measures* are being taken to reduce crime in the city.

d. The 1936 Olympics were used as a *vehicle* for Nazi propaganda. LDOCE

(22a)の drill は「きり、穴あけドリル」が元の意味。ここから、「反復しながら切り進むドリルの機能」(『多義ネット』 p. 290)に着目して、「(繰り返し用いられる)手段」に意義拡張する。この意義は、古風なイギリス英語である。(22b)の lever は「てこ、レバー」が元の意味。(20e)の leverage (てこの力)は類縁語。日本語の「てこ」も「手段・方法」の意義があることが興味深い。例えば、「外圧をてこにして市場を開放する」「強情でてこでも動かない」(『広辞苑』 p.1827)。(22c)の measure は「はかり」がその本来の意味。ここから、「『測る』作用」(『多義ネット』 p. 595)に着目して、「(人・物事の価値などを測る)手段」に意義拡張する。

張する。(22d)の vehicle は「乗物」が元の意味。ここから、「物事を無事達成にまで運んでくれるもの」(『多義ネット』 p.1032) に注目して、「(物事を達成する) 手段」に意義拡張する。(22b)の lever は、かろうじて日本語の発想との対応があるが、それ以外は、日英語での興味深い発想のズレが窺える。

次の(23)の passport と ticket はいずれも本来、(20d)の key と同様に、「ある場所を通過する際に必ず必要になる道具」を表す。ここから、「(ある目的を達成する際に必ず必要になる) 手段」に意義拡張する。

(23) a. She saw a good diet as a *passport* to good health.

b. Michael thought an MBA would be a *ticket* to success.

LDOCE

(23a)は「彼女は、良いダイエットは健康になるパスポートと考えていた」、(23b)は「マイケルは、MBA が成功への切符になると考えていた」を意味する。両者ともに日英語間での認識・発想上の対応があると見ていいだろう。

次の(24)の door, gateway, window は、いずれも本来「ある空間から別の空間に入るための入口」を表す。ここから、「(ある目的を達成する際に必ず必要になる) 手段」に意義拡張する。

(24) a. Einstein's theory opened the *door* to the nuclear age.

グローバル

b. To me a home in the country is a *gateway* to happiness.

LDOCE

c. Television is a *window* on the world.

NODE

(24a)は「アインシュタインの理論は、原子力時代への扉を開いた」、(24b)は「私にとってその国にある家は、幸福への扉だ」、(24c)は「テレビは、世界に通じる窓だ」を意味する。この場合も、日英語間で認識・発想上の対応があると見ていいだろう。

(25)は、もともと「トランプ」と関わる表現である。

(25) a. But then he decided to play his *trump card*.

LDOCE

b. His only choice at present was to wait for the right moment to play his *hand*.

多義ネット

(25a)の trump card は、様々なトランプカードのうちの「切り札」を指す。(25a)は「でもその時彼は切り札を使う決心をした」という意味。(25b)の hand は、もともと「(人の) 手」を表し、そこから「入れ物で中身」によるメトニミー展開により「(手の中にある) 持ち札」に意義展開する(『多義ネット』 p.439)。その「(手の中にある) 持ち札」が、さらにメタファー

により比喩的な「打つ手」に意味が広がる。よって、(25b)は「彼の現在の唯一の選択肢は、手を打つ適切な瞬間を待つことだった」となる。この場合も、日英語間で認識・発想上の対応があると見ていいだろう。

最後に、(26)を見よう。今までは全て名詞の例であったが、MEANS ARE TOOLS タイプには前置詞の例もある。

(26) They set up a business *with* the help of a bank loan. CIDE

(26)の「手段・方法」を意味する *with* は、He was shot at close range *with* a pistol. (CIDE) などの「道具」を意味する意義からの拡張と考えられる。

3. 3 その他の事例 (MEANS ARE MEDICINES タイプ, MEANS ARE LIFELINES タイプなど)

前二節で、「手段・方法」を表す英語のメタファー表現を2つの大きなタイプに分類し、考察した。本節では、この2つのタイプとは異なり、かつ類例がさほど多くなくひとつのタイプとして認定するには心許ない例を確認する。

まず、(27)を見よう。

- (27) a. Regular exercise is the best *antidote* to tiredness and depression.
 b. The best *cure* for boredom is hard work. CIDE
 c. Laughter is the best *medicine*. LDOCE
 d. The best *remedy* for grief is hard work. CIDE

(27a)は「定期的な運動は、疲労や憂鬱に対して最良の薬だ」を意味する。(27b)は「退屈を紛らわす最良の解決策は、熱心に働くことだ」、(27c)は「笑いは、最良の薬だ」、(27d)は「悲しみを紛らわす最良の解決策は、熱心に働くことだ」を意味する。それぞれ本来「解毒剤」(27a)や「治療薬」(27b-d)などの「医薬品」を指す語が、「手段・方法」を比喩的に意味する。ここには、ある「目的」を達成するために取られる「手段・方法」を、「健康」を快復ために投与される「医薬品」と捉える見方がある。MEANS ARE MEDICINES タイプといえる。

次に、(28)を見よう。

- (28) a. She was my *anchor* (age) when things were difficult for me. CIDE
 b. An extra lock on the door is an added *insurance* against burglars. LDOCE
 c. For many old people living on their own the telephone is their *lifeline* to the outside

world.

- d. No one dies of hunger there because the government provides a *safety net* of payments to the unemployed. CIDE

- e. The Bible was her *refuge*. グローバル

(28a)は「状況が困難なときに彼女は私の支えだった」、(28b)は「そのドアにある予備の錠は、泥棒に備えた二重の対策だ」、(28c)は「一人で生活する多くのお年寄りにとって、電話は外の世界とつながる生命線だ」、(28d)は「餓死者がいないのは、政府が失業者給付という保護手段を提供しているからだ」、(28e)は「聖書は、彼女の心のよりどころだった」を意味する。

それぞれ本来「錨」「保険」「命綱」「安全ネット」「避難所」など、「人の生命・財産を守るもの」を指す語が、「手段・方法」に意義をメタファー拡張させる。ここには、ある「目的」を達成するために取られる「手段・方法」を、「人の生命・財産を守る」ために存在する「よりどころ」と捉える見方がある。MEANS ARE LIFELINES タイプといえるかもしれない。

最後に(29)を見る。(29)でひとつのタイプというわけではない。「手段・方法」を表す英語のメタファー表現には、このように、その他種々雑多な発想に基づく表現が散発的に存在する。

- (29) a. It seemed rather an odd *manner* of deciding things.
 b. Advertising is a powerful *medium*. LDOCE
 c. In a *move* to end the strike, management accepted the worker's demands. 多義ネット
 d. What's her *recipe* for success? OALD
 e. Economic sanctions will be used only in the last *resort*. LDOCE
 f. He had no other *resource* but to run away. グローバル

それぞれの語の本来の意味は、(29a)は「振舞い」、(29b)は「Mサイズ」、(29c)は「動き」、(29d)は「レシピ」、(29e)は「行楽地」、(29f)は「資源」である。これらを意義展開の起点として、「手段・方法」の意義に広がる。

本節では、前二節で見た MEANS ARE (PART OF) PATHS タイプと MEANS ARE TOOLS タイプの表現とは異質と考えられる事例を見た。MEANS ARE MEDICINES タイプも MEANS ARE LIFELINES タイプも、広く捉えれば、MEANS ARE TOOLS タイプに組み込むことも可能かもしれない。しかしながら、両者はともに「健康や生命の維持」という特殊な背景知識を前提にする表現であるために、節をかえて独立に論じた。この点のさらなる考察は、(29)の類例のさらなる精査とともに、今後の課題としたい。

4 結 論

本稿では、認知言語学の知見を生かし、「手段・方法」を表す英語のメタファー表現について考察した。大きく2つのタイプに分類できた。ひとつは、MEANS ARE (PART OF) PATHS タイプ。このタイプは、ある「目的」を達成するために取られる「手段・方法」を、「目的地」に通じる「経路」とする捉え方であった。もうひとつは、MEANS ARE TOOLS タイプ。こちらは、ある「目的」を達成するために取られる「手段・方法」を、ある「用途」を果たす「道具」とする捉え方であった。この2つのタイプ以外にも、事例は少数だが、MEANS ARE MEDICINES タイプや MEANS ARE LIFELINES タイプなどの認識による表現も見られた。

注

* Timothy P. P. Grose 氏, Richard D. Ide 氏, Don W. Hinkelman 氏には、インフォーマントとして、本稿で扱った全例文をチェックして頂くとともに、貴重なコメントを頂戴した。心より感謝申し上げます。

- (1) メタファーを代表とする比喩研究の系譜については、瀬戸 (2005) の終章を参照。
- (2) 辞書名には略語を用いる。正式名称との対応については、末尾の「辞書」を参照。
- (3) (20b) にある engine の文字通りの意義は、「(火 [電, 水] 力を機械の動力に変換する装置としての) 機関」である。この本来の意義から、search engine の場合は、「情報検索」という用途を果す「手段・方法」に意味が広がる。類例は、The Marshall Plan was the engine of postwar economic growth. (LDOCE) 「マーシャルプランは、戦後の経済成長の原動力であった」など。
- (4) (20c, f) の instrument/machinery of government は「政府機関」を意味する。それぞれの文字通りの意味は、instrument が「道具」、machinery が「機械」であり、そこからメタファーを介し「(組織としての) 機関」に意味が広がる。この場合の「(組織としての) 機関」も「手段・方法」のひとつといえる。興味深いのは、日本語の「機関」が「(火 [電, 水] 力を機械の動力に変換する装置としての) 機関」から「(組織としての) 機関」に意味拡張するのに対し、注(3)で見た、英語の“engine”は「(組織としての) 機関」に意味が広がらない点である。なお、instrument と machinery は、「(組織としての) 機関」以外の「手段・方法」も表す。例えば、Interest rates are an important instrument of economic policy. (LDOCE) 「金利は、経済政策の重要な道具である」や an elaborate machinery of democratic election (グローバル) 「民主的選挙という精巧な仕組み」など。
- (5) (20g) にある the tools of the trade の類例としては、A politician's mouth is the most important tool of his trade. (グローバル) 「政治家は口が最も重要な商売道具だ」などがある。

引用文献

- Kövecses, Zoltán (2002) *Metaphor: A Practical Introduction*. New York: Oxford University Press.
 Lakoff, George, Jane Espenson, and Alan Schwartz (1991) *Master Metaphor List*. 2nd ed. Cognitive Linguistics Group. University of California at Berkeley.
 Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
 瀬戸賢一 (2005) 『よくわかる比喩』東京：研究社。

辞 書

- Cambridge International Dictionary of English. 1st edition. 1995. [CIDE]
 Collins Cobuild English Dictionary. 5th edition. 2006. [Cobuild]
 Longman Dictionary of Contemporary English. 4th edition. 2003. [LDOCE]
 Macmillan English Dictionary. 1st edition. 2002. [Macmillan]

Oxford Advanced Learner's Dictionary. 7th edition. 2005. [OALD]

The New Oxford Dictionary of English. 2nd edition. 2003. [NODE]

『英語多義ネットワーク辞典』初版. 2007. 瀬戸賢一（編集主幹）小学館. [多義ネット]

『新グローバル英和辞典』第2版. 2001. 木原研三（監修）三省堂. [グローバル]

『広辞苑』第5版. 1998. 新村出（編集）岩波書店. [広辞苑]

コーパス・サーチエンジン

The British National Corpus. (<http://scn02.corpora.jp/~sakura04/index.html>) [BNC]

Google. (<http://www.google.co.jp/>) [Google]

A Study on Metaphorical Expressions Referring to 'Means' or 'Methods'

YAMAZOE Shugo

Abstract

Metaphor reflects our ability to 'construe' one thing in terms of another. In some cases, 'means' or 'methods' which are used to achieve certain goals are expressed metaphorically. For instance, "She has explored all the available *avenues* for change." (Kövecses 2002: 138), "He finally found the *key* to the problem." (Lakoff, Espenson, and Schwartz 1991: 195), "Laughter is the best *medicine*." (LDOCE), to cite just three examples. In addition to such examples, how many metaphorical expressions designating 'means' or 'methods' are there in English, actually? What types can these metaphorical expressions be classified under? And how are 'means' or 'methods' construed in these metaphorical expressions? The purpose of the present paper is to address within the framework of Cognitive Linguistics the questions above on such metaphorical expressions representing 'means' or 'methods'.

Keywords: 'means' or 'methods', metaphorical expressions, conceptual metaphors, polysemy, meaning extension

（やまぞえ しゅうごう 本学人文学部専任講師 英語学専攻）